

ネット型ゲームの指導に関する一考察[†]

ープレルボールの授業実践を通してー

松尾 正輝*・黒後 洋**
 宇都宮市立石井小学校*
 宇都宮大学教育学部**

概要

学習指導要領第3・4学年のネット型ゲームで例示されているものに「プレルボールを基にした易しいゲーム」がある。プレルボールについては、従来の指導内容に明記されたものではなく、体育を指導する教員の中には、その授業の進め方や支援の方法に戸惑うことも多いと考えられる。本研究では、小学4年生を対象に、プレルボールの授業を実践し、筆者の体験や授業に対する児童の感想から、その学習の有効性について考察するとともに、授業の進め方や教具などを示した指導手順を作成し、提案することを目的とした。

授業実践の結果、ネット型ゲームの導入期の教材として「プレルボール」が有効であることや、指導上の留意点、学習の系統性における課題が明らかになった。

キーワード：プレルボール，3・4年生，ネット型ゲーム

1 はじめに

小学校3・4年生のボール運動の内容

前回の指導要領	現在の学習指導要領
<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットボール型 ・サッカー型 ・ベースボール型 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール型 ・ネット型 ・ベースボール型

平成20年度の学習指導要領の改訂で、小学校ゲーム領域の内容が変更となった。以前は「バスケットボール型ゲーム」、「サッカー型ゲーム」、「ベースボール型ゲーム」であったが、種目固有の技能ではなく、それぞれの運動が有する特性や魅力に触れ、攻守の特徴や「型」に共通する動きを系統的に身に付けるという視点と、中学校・高等学校への系統性を図る視点で内容が整理され、「ゴール型ゲーム」「ネット型ゲーム」「ベースボール型ゲーム」となった。つまり、平成20年の改訂で、小学校3・4年生のゲーム領域で「ネット型」の学習が実施されるようになった。

ネット型ゲームの例示の一つにプレルボールがある。プレルボールとは、2チームがネットをはさんで向かい合い、相手コートにボールを手で打って返すスポーツで、ネットをはさんでボールを打ち合うところはバレーボール、ボールをバウンドさせるところはテニスや卓球に似ている。プレルボールについては、従来の指導内容に明記されたものではなく、体育を指導する教員の中には、その授業の進め方や支援の方法に戸惑うことも多いと考えられる。そのような教員に対して、単元を通じた指導手順や教具の例示を行うことは意義あるものと考えられる。本研究では、小学4年生を対象に、プレルボールの授業を実践し、筆者の体験や授業に対する児童の感想から、その学習の有効性について考察するとともに、授業の進め方や教具などを示した指導手順を作成し、提案することを目的とした。



[†] Masaki MATSUO*, Hiroshi KUROGO** : The study of teaching net type games; The study on teaching prellball

Keywords : prellball, the third and fourth students in elementary school, net type games

* Ishii elementary school, Utsunomiya city

** Faculty of Education Utsunomiya University (連絡先:kurogo@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者2)

2 授業者及び児童について

授業実践は第4学年（男子16名，女子17名）を対象に，筆者が「シュートプレルボール」の授業を9時間行った。

3 第3学年の及び第4学年の目標及び内容

第3学年及び第4学年のゲーム領域「ネット型」の目標は、「ネット型ゲームでは，ラリーを続けたり，ボールをつないだりして易しいゲームをすること。」である。

観点別では，「技能」は，サービス，パス，返球などボールを制御する「ボール操作」と，ボールの落下点に走り込んだり，味方をサポートしたりする操作に至るまでの動きや守備にかかわる「ボールを持たないときの動き」に分かれる。「態度」は，規則を守る，準備や片付けを友達と一緒にやる，場や用具の安全に気を付ける，進んで取り組むことである。「思考・判断」は，規則を工夫したり簡単な作戦を立てたりすることである。これらの内容を踏まえ，以下のようにプレルボールの教材を考案した。

4 プレルボールの教材化

プレルボールは，ソフトバレーボールに比べボール操作が簡単だが，そのままのルールでは児童にとって難易度が高く，ゲームを楽しむことができない。そのため，先行実践を分析し，児童の実態を踏まえて，先に述べた学習の目標を達成できるよう教材化した。

(1) 教材化の要点

- ①「キャッチ」と，相手コートに投げ入れる「シュート」を行う「シュートプレルボール」とした。
- ②1チームを3人にして，全員がボールをさわってから3回で相手コートに返すルールとした。
- ③サービスやプレルのルールを簡易化し，ラリーが継続するようにした。

5 授業実践について

ボールの操作に個人差が大きいことが予想されたため，単元前半は個人の技能を伸ばせるような学習活動を多く取り入れた。また，後半のゲームにつながるために，実際のゲームに近い活動を行いながら技能を高めつつ，ルールの理解が進むような学習活動とした。

(1) 授業計画

①プレルボールの映像を視聴

第1時では，プレルボールの特徴についての説明と，学習のゴールイメージをつかませることを目的に，児童にプレルボールの映像を視聴させた。児童

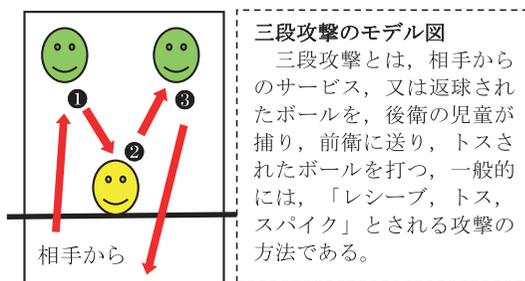
の感想から，この学習はプレルボールの理解や意欲を高めるために有効であったと考えられる。

②チームと兄弟班の編成

チームは男女混合の3人とした。体格や運動能力を考慮して担任が決めた。同時に兄弟班も作り，準備や後片付けを効率的に行えるようにした。単元前半では，兄弟班でワンバンパスを行ったり，班同士でサークルパスの回数を競ったりと，チームや班が学習活動において機能できるよう配慮した。

③三段攻撃の指導

ネット型の種目は，ネットをはさんだ攻防が特性の一つであるが，これまでも能力の高い一部の児童が前衛でボール操作を独占し，チームとして機能していない状況を目にしたことがあった。今回は，そのことを考慮して授業計画を立てた。その柱となっているのが三段攻撃である。



攻撃の仕方については本来，活動を通して児童自身が見出していくものであるが，今回の実践では，児童にどのような攻撃が有効かを問いかけながら，三段攻撃の方法と，コート上での基本的な守備位置について教師が指導する方法をとった。理由は，以下の3点である。①限られた学習時間の中で，ゲームを楽しみながら技能を高めるためには，児童が効果的な攻撃の仕方を理解するまでに，時間を十分にかけることが得策ではないと考えたこと。②また，その結果，技能習得のための活動量は確保され，技能が上達すると考えたこと。③さらに，ゲーム形式の練習をたくさんできることで，プレルボールの学習内容が充実すると考えたことである。しかし，児童に攻撃や守備の作戦を考えさせることは，運動に対する思考力・判断力を身に付けさせる学習では重要な要素であり，この部分の学習の進め方については検討の余地がある。

④ラリー継続のためのサービス

筆者の高学年でのソフトバレーボールの指導経験から，児童が学習中に一番盛り上がる場面はラリー

が継続した後にポイントが決まった時であった。本実践でもラリーが継続するためのルールの一つとして、「ポイントを取るためのサービスを行わない」こと設定した。実際に児童らは「いくよ」と声をかけ、両手で相手コートの中の真ん中に投げ入れることで、最初からラリーが途切れることはなく、ゲームを始めることができていた。

(2) ルール変更

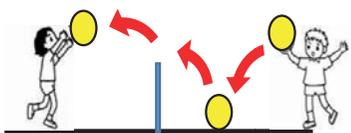
ゲーム形式の学習を始めると、想定外の学習状況が表れたため、以下の3点についてルールを変更しゲームを実施した。

① ノーバウンドのプレルも可

最初のルール



変更後のルール

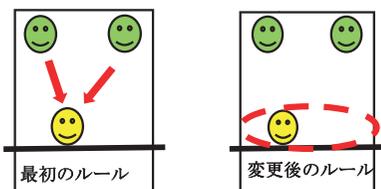


② 多少のキャッチ（持つような動作）も認める。



③ 最初のルールは、1本目は必ず後衛が捕る。

変更後は、1本目を前衛が捕ってもよい。



①は、児童が様々な返球やパスに対応してゲームを行っていたことと、活動に積極性がでてきたことから、児童の提案に応じルールを変更した。なお、変更後はゲーム実施上の問題はなかった。

②は、身長が低い児童が一生懸命ボールを捕りに行く時と、相手に正確にパスをする時に、一瞬持つような動作が見られるようになった。「ラリーが続く方が楽しい」という意見から、全体で話し合っ

めるようにした。

③は、三段攻撃ができるようになるために、1本目は必ず後衛のどちらかが捕り、前衛に返すルールとしていたが、三段攻撃ができるようになったことと、前衛しか捕れないコースを狙うようになったことから、前衛が1本目を捕ることも可とした。なお、全員がさわって3回で返球するルールは継続した。この変更は予定通りであった。

6 授業実践を終えて

簡単なルールを身に付け、集団対集団で勝敗を競うことにより、楽しさや喜びを味わうことができていたことや、三段攻撃を全員が理解し、できるようになったことから、プレルボールを基にした易しいゲームが、中学年のボール運動の目標を十分に達成できる種目であると考えられた。

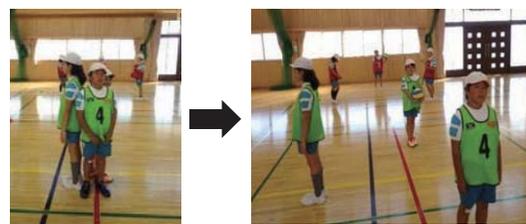
7 指導ガイドの作成

指導ガイド（2時間目から抜粋）

(1) ガイド2時間目 サークルパスの説明

サークルパスについて

- ① 3人が外を向いて背中合わせになる。
 - ② 大きく1歩前に出る。
 - ③ 内側を向いてサークルパスを行う。
 - ④ 続くようになったら、もう1歩外に広がる。
 - ⑤ 反対回りでやってみる。
 - ⑥ 制限時間内に何回続いか競争する。
- ※教師は各グループを回り、アドバイスをを行う。



(2) ガイド2時間目 三段攻撃の説明

コートにいる3人が必ず1度ボールをさわることにしている。それには三段攻撃が有効である。後衛に2人、前衛に1人の三角形の守り方がよいことを、実際に児童をコートに入れて説明するとよい。この時点では、1本目は後衛のどちらかが捕り、2本目は前衛が必ず捕ることを十分に伝えないと(三段攻撃ができるようになったら変更)、サークルパスの感覚で、隣の人にパスをしてしまうことになる。前衛はネットに向かってやや右側で構えると良い。

授業実践や研究を踏まえ、1単元分（9時間）の指導ガイドを作成した。合わせて、コート

方やリーグ戦の組み方、効率的な集計の仕方や学習カードなど、指導の際に参考となるものも作成し活用できるようにした。

8 児童へのアンケートから

男子16人 女子17人 計33人

(1) ボール遊びの実態

日常生活における、休み時間を含めたボールの使用頻度は、男女共スポーツ少年団等に入っていて日常的に使用している児童8名を除き、23名が体育科の学習以外で使用するの、週1回以下であった。しかし、「ボールを使った体育の授業や遊びは好きですか?」の質問には、「好き」「どちらかと言えば好き」を選択した児童は33人中30人であった。児童の多くがボール遊びが好きであるにもかかわらず、ボールを使って遊んでいる児童が少ないということは、遊ぶ場がない、時間がない、使用できるボールがないという理由が考えられる。また、ボール遊びの経験の少なさから遊び方を知らないことも推察される。しかし、これらのことは推察の域を出るものではない。したがって、この原因を調査し、対策を講じることでボールを使用して遊ぶことが増え、児童の体力やボールを操作する技能の改善が可能であると考ええる。

(2) 教材としてのプレルボール

「体育館で最初に「プレル」を体験して、どのように思いましたか。」の質問には、普段、ボールで遊ばない児童が多い中、「簡単そう」「むずかしそうだけど、できそう」と、7割以上の児童が肯定的にとらえられていた。このことから、バウンドをしてボールを捕るなどのプレルボールにおける基本動作は児童が学習しやすいものと考えられる。

(3) 技能が高まった学習活動

プレルの技能が高まった練習について(複数回答)は、29人の児童が「サークルパス」の練習をあげた。単元前半はプレルの技能向上を目的に、単元後半でもウォーミングアップを兼ねて毎時間行っていたことがその大きな理由と考えられる。2番目に多かった「ラリーを続ける練習」、3番目に多かった「大きなコートでの練習やゲーム」から推察すると、チームで協力して数を競ったり、仲間とラリーを続けたりする活動が、児童の技能向上や意欲を高めるためにも有効だと考えられる。

9 「ネット型」の学習における指導上の課題と対策

今回の研究を通して私が感じた課題の一つ目は、「ボール操作技能の個人差が大きいこと」である。

そのため、低学年から様々な運動を経験させ、体育科の時間だけでなく、休み時間なども含めて、体を動かすことやボールを扱うことを継続して取り組むことにより個々の技能を高める必要がある。しかし、対策をしても個人差は必ず小さくなるわけではない。今回実践したプレルボールは、個人差があっても児童が意欲的に取り組み、技能を高められる学習であった。このことから、授業を通して個人差を小さくすることは可能であった。

二つ目は、「中学校のネット型の学習は、コートやルールを簡易化する必要があること」があげられる。今回の研修中に、中学校のバレーボールの授業を見る機会があったが、学習期間中にラリーや三段攻撃を行うことは難しい印象をもった。研究会に参加した他校の教諭も、ゲームを楽しむレベルまでいかずに学習が終わってしまうことが多く、指導が難しいことを指摘していた。このことについて「小学校でしっかりと技能を身に付けさせていないから」という考えもあるが、児童の発達段階や単元の総学習時間を考慮すると、バレーボールを行うための技能水準まで高めることは難しい。バスケットボールは、未経験者が公式ルールで行ってもある程度ゲームが成立するが、バレーボールは難易度が高く、そうはいかないと考えられる。つまり、小学校から系統性を踏まえて学習しても、中学校の体育科の学習で「バレーボール」を行うことは、求められる技能に差があり十分に楽しむことが難しいと考えられる。以上のような理由から、中学校でのネット型の学習は、児童の実態や小学校での指導内容を踏まえ、種目の特性や楽しさを感じられるように、簡易化したコートやルールの工夫を積極的に取り入れていくことが必要ではないだろうか。

現在、小中連携が進んでいる。体育科の指導についても、実態や指導内容について互いが理解し合うことで、充実した体育科の授業となるのと考ええる。

引用・参考文献

- ・小学校学習指導要領解説 体育編
- ・学校体育実技指導資料第8集ゲーム及びボール運動
- ・体育科教育 2013年5月号
- ・あたらしいボールゲーム③プレルボール
- ・平成27年度授業実践事例集 ―研究の軌跡―
宇都宮大学教育学部附属小

平成28年3月31日 受理